

令和2年2月10日

(事務担当)

伝統産業振興室 下野

[TEL:076-225-1526](tel:076-225-1526) (内 4465)

伝統工芸とファッションの融合による新市場創出支援事業

令和元年度に開発した新商品のお披露目会

取材のお願い

石川県及び公益財団法人石川県産業創出支援機構では、県内伝統産業事業者等に対し、本県の伝統的な技術・技法とファッションを融合したこれまでにない魅力的な新商品の開発を行う機会を提供することで、本県伝統産業の新市場創出を図ることを目的として、本事業を実施しています。

このたび、ファッションジャーナリスト生駒芳子氏がプロデュースする日本の伝統素材と技、デザインを融合させて誕生したブランド「HIRUME」と本県の伝統的工芸品である「加賀友禅」、「輪島塗」、「能登上布」が連携して開発した新商品のお披露目会を下記のとおり開催いたします（詳細は別紙参照）。ぜひ取材して頂きますようお願い致します。

記

◇日時・スケジュール：2月12日（水）

16：00 開宴

17：00 トークショー開会

挨拶：重松 理 (株)ユニテッドアローズ名誉会長、
生駒芳子

17：10 参加事業者トークショー

コーディネーター：生駒芳子

18：00 レセプション

◇場 所：公益社団法人 日本服飾文化振興財団

(東京都港区赤坂8-1-19 日本生命赤坂ビル8F)

アクセス：青山駅1丁目駅「出口4北」より徒歩3分

<問い合わせ及び取材申し込み先>

HIRIME/アートダイナミクス 03-5722-6311

HIRUME 担当・手柴 teshiba@f-wao.com



伝統が革新されるとき
「石川県の伝統工芸がモダンに進化する」
&
「特別コラボレーション 順理庵 × HIRUME」

ファッションジャーナリスト生駒芳子が総合プロデュースするブランド「HIRUME」は、日本が誇る伝統技術や素材をベースにして、時代感に合わせたクリエイティブなアイテムを誕生させています。日本で伝統工芸に携わる職人たちのほとんどが、イタリアやフランスに勝るとも劣らない卓越の技術を手にしながら実は、「未来がない」と嘆いている。そんな現状に衝撃を受けた生駒が、彼らとともに未来を見るために立ち上げました。3年目となる石川県の伝統工芸職人との取り組みも、HIRUMEの重要なプロジェクト。今回は、「加賀友禅」「輪島塗」「能登上布」の新作をご紹介します。

また、これらの発表の場を頂いた順理庵とのコラボレーションアイテム、金蘭×シルクスカジャンと、金蘭コートもお披露目します。

HIRUME

■Concept

—Laboratory for Arts and Crafts—

…グローバリゼーションの果てには、19世紀後半のウィリアム・モリスが予見しているように、いま一度、芸術と生活が一致する時代がやってくる…

HIRUMEは、伝統工芸の技やモチーフと、現代的なデザイン、アート、ファッションが会うことで、化学反応が生まれる実験室。

また、伝統工芸の後継者育成を支援するブランドでもあります。

古代、現代、未来を循環させる日本のものづくりの力を、世界に発信します。

■Profile

Producer / 生駒芳子 Yoshiko Ikoma



ファッションジャーナリスト、アート・プロデューサー。VOGUE、ELLE の副編集長を経て 2008 年より「マリ・クレール」の編集長を務め、独立。ファッション、アート、デザインから、社会貢献、クール・ジャパンまで、カルチャーとエシカルを軸とした新世代のライフスタイルを提案。地場産業や伝統産業の開発事業、地域開発など、地域創生に数多く取り組む。2015 年より文化庁日本遺産のプロデューサー事業を手掛ける。

Designer & Director / 永野幸治 Koji Nagano



ヨウジヤマモトでディレクターのキャリアを積み、2004 年 numero inc. を設立しパリでブランドデビュー。その後、海外のラグジュアリーブランドのディレクターを務め、現在はフリーランスのデザイナーとして活動。

■石川県の取り組み

生活様式の変化などに伴い石川県内の伝統的工芸品生産額は年々減少しています。しかし北陸新幹線の金沢開業、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック開催、国際北陸工芸サミットの石川開催、国立工芸館（東京国立近代美術館工芸館）の金沢移転などを契機に、石川県が誇る伝統工芸を国内外に発信し、新市場を創出すべく、生駒芳子と連携しながら 2017 年より「伝統工芸とファッションの融合による新市場創出支援事業」を展開しています。

脈々と受け継がれてきた伝統技術を遺憾なく発揮しつつ、現代のライフスタイルに合ったデザイン性のある、創造性溢れるアイテムの開発を支援することで、ファッションという新市場において、伝統工芸の継承の可能性を見出しています。

■ジャケット（加賀友禅）

加賀友禅 400 年の歴史をつねに意識しながら伝統の職人技法を三代に渡って守ってこられた加賀友禅工房「毎田染画工芸」。友禅の工程を一貫生産にて制作、伝統を重んじつつ時代の空気や感性を読み、新しい意匠や他分野での友禅のあり方を模索されています。

HIRUME が願ったのは、加賀友禅の新しい表現と、受け継がれてきた伝統柄を同時にお見せすること。南アフリカ原産の花アガパンサスは、暖色系で華やかに。古典文様の麦は、寒色系でスタイリッシュに。2つの文様をあしらったシルクのロングカクテルジャケットは、ローブのようになめらかにしなやかに身体を包みます。



加賀友禅作家 毎田仁嗣（毎田染画工芸 3代目）

金沢市生まれ。1998年より父健治に師事、デザイン、彩色のほか、通常は外注で行われる糊置き、染など友禅の全ての工程を学ぶ。

その後、原料の違う糊を用いて重ね染する独自の技法を確立。

2005年に落款登録し作家活動を始めた。古典文様や落ち着いた色調の従来の加賀友禅にとらわれず、軽やかな色彩やモダンな作風を特徴としている。

星野リゾート界加賀の室内装飾、フロリダ州ウォルトディズニーワールド ユニクロのメインエントランスディスプレイといった内装装飾から、ストールなどの小物まで幅広く手掛ける。



■ボタン（輪島塗）

1818年創業、200年以上の歴史を持つ田谷漆器店。神社仏閣、料亭や旅館で使われる漆器はもちろん、国宝や重要文化財の修復においても高い評価を受けています。

自藩の産業興隆に努めた加賀藩には、五代藩主である前田綱紀が編集した工芸の百科事典ともいえるべき「百工比照（ひゃっこうひしょう）」がありました。紙・木・竹・染織・革・金属の素材を加飾する工芸技術百般の標本群で、刀の鞘にも多く施されたと言われていました。

現代の技術で再現は難しいとされていたこの「百工比照」を、ボタンの上に復活して頂きました。加賀友禅のジャケットに、付け替えてお楽しみください。



田谷昂大（田谷漆器店 10代目）

輪島市生まれ。東京の大学を卒業後、外資系ホテルで働いたのち、24歳で輪島に帰郷。二度と戻ることはないと思っていたが、販売会を手伝った際、器を買った方々の幸せそうな顔を見て衝撃を受ける。実家は人を喜ばせる家業であることに気づき、ここに自分の仕事があると、田谷漆器店への入社を決意。

現在では輪島塗を世界に広げるべく、漆器プロデューサーとしても活動の幅を広げている。



■バングル・ブローチ・イヤリング・ピアス（輪島塗）

蒔絵を主体に、沈金や日本ならではの天然顔料岩絵具、螺鈿など多様な貴材を駆使して、伝統の装飾技術を進化させてきた三谷尚史さん。従来の手わざ工芸装飾技術を、アクセサリーを含むさまざまな商品に応用されてきました。

工房を訪れて、特に驚いたのはアクリルの沈金。傾きによって異なる煌きをみせ、印象を変える黄金の羽に目を見張りました。ラッキーモチーフでもある羽のモチーフがもっとも美しく映えるようにと、試行錯誤を重ねて生まれたのがこの4種です。

漆黒の漆とゴールドのコンビネーションが、装いに輝きと趣きを与えます。



三谷尚史（アトリエ MITANI）

1769年より代々漆業をつなぎ、現在では蒔絵漆芸を主に手がける。90年代からウェブサイトでの情報公開を進め、他分野との連携を実施。その技術を漆器以外の製品へも展開してきた。

2004年のフランス パリ メゾン&オブジェでは、蒔絵技術の製作品よりも装飾技術の魅力や特徴のPRを主としたブースを出展、6年継続する。これによって海外のピアノメーカーや楽器関係、装飾関係の会社とも関係が構築され、装飾技術素材としての供給も行なっている。



■バングル（輪島塗）

今年創業 100 年を迎える采色塗なか門。4 代目である中門博さんは、100 色以上の色漆を生み出してきました。特に色漆のグラデーションによるモダンな漆器は斬新かつ革命的で、今までの輪島塗の概念を打ち破り豊かな色彩表現の道を開いています。

色漆は色の調合、乾く時の乾燥の仕方では色が変化するため、高度な技術力と経験が必要とされます。また特に全く違う色のグラデーションは漆の乾燥や厚み、濃度などにまで繊細な調整が求められます。

その日その日で湿度や気温によって、まるで生き物のように違う表情を見せる色漆。あえて全く異なる色の組み合わせに挑戦、唯一無二のバングルが完成しました。



上塗の伝統工芸士 中門博(采色塗なか門 4 代目)

輪島市生まれ。20 代では輪島塗の最終工程の上塗を専門として、毎日 200 枚程のお盆を手がける。30 代になり、上塗だけで自分らしさを表現する塗り方ができないかと試行錯誤を繰り返すなかで、昔からある輪島塗の色、赤漆と黒漆のグラ



デーションを再現させ、さらに現代の生活に合うように、漆に艶感をもたらし、色を再現し、輪島塗の新しい世界を広げた。

工房下に「職人ギャラリー中門」を開業、デザインから塗りまで手掛けたオリジナル商品の展示販売も行う。

■トートバッグ・ポーチ・PCケース（能登上布）

上布とは上等な麻織物のこと。約 2000 年前に崇神天皇の皇女が中能登地方で機織りを教えたことが能登上布の起源だと伝えられています。江戸時代に技術向上を続けて発展し、明治時代皇室の献上品に選ばれるまでになりましたが、その後は「滅びゆく能登上布」と言われ

るほど、厳しい時期も経ることになります。

しかし、今も昔ながらの手織りで織られる能登上布は、ひんやり涼しい風合い、「蝶の羽」のような透け感、シャリ感、光沢感、張り感があり、夏の最高級の着物として愛好されています。

能登独自の櫛押捺染やロール捺染と呼ばれる職人技術から生まれる繊細で上品な縞模様。能登の風土を生かした凛とした縞柄や縞模様、落ち着いた色合い。

能登上布ならではの清浄な素朴さを現代的なアイテムに用いることで、不思議にモダンな雰囲気が生まれました。



山崎隆（山崎麻織物工房）

1891 年、羽咋市で能登上布の紺屋（染め屋）として創業した山崎麻織物工房の代表。

能登上布は昭和初期の最盛期、麻織物の生産量日本一になったが、戦後着物離れが進み、織元が年々減少。現在山崎麻織物工房が伝統の技を継承する唯一の織元になった。

リーマンショック以降着物問屋からの注文が半減した危機的状況の中、2012 年ファッション小物雑貨の独自ブランド RAMIE EPOCH を設立。能登上布から作られたストールなど日常づかいが可能な商品が好評で、フランス パリ メゾン&オブジェなど国内外の見本市にも出展している。



■順理庵 × HIRUME



スカジャン

HIRUME のシグニチャーアイテムであるスカジャンを順理庵との W ネームで展開します。

片面はシルク。胸に順理庵と HIRUME のロゴ、背中にも順理庵のロゴを施しました。

片面は金襴。青海波文様を袖に、宝尽くし文様を見頃に使用しています。

コート

お雛様や日本人形、表装、袷裳などに使われてきた金襴の生地。吉祥文様として古くから親しまれてきた青海波と宝尽くし。金襴で表現した青海波と宝尽くしが、コートになりました。漆黒の中に、日本独特のモチーフがきらめきます。

〈お問い合わせ〉

株式会社アートダイナミクス

150-0001 東京都渋谷区神宮前 4-9-13 ミナガワビレッジ #3

Tel 03-5722-6311

HIRUME 担当 手柴 090-7882-6106/teshiba@f-wao.com